

ぐるだいニュース

第12号

(1998年5月30日)

発行所：〒631 奈良市山陵町1500
奈良大学社会学部（矢守研究室）
日本グループ・ダイナミクス学会
電話：0742-43-6374
発行人：杉万俊夫 編集担当：大坊郁夫

札幌は、ライラック、これから、アカシヤと続く芳しい季節です。

今年の大会は、日本の真ん中名古屋で。少し暑い時期ですね。日本の心理学ワールドでは、学会間の関係などについての考えがいくつか出てきています。とりわけ近接の社会心理学会との関係についての提案も本号にあります。アイデンティティにかかわることでもありますね。また、今年は理事等の選挙の年です。手続き等をよく確認し、そして積極的な投票を。改めて、会長の長田先生はじめ名古屋大学の、そして関係の方々、大会をどうぞよろしく願います。（坊）

★★ 意見 対 意見 ★★

日本社会心理学会との合併について

一橋大学 村田光二

日本グループ・ダイナミクス（本学会）はグループ・ダイナミクス（GD）だけを研究する学会でしょうか。学会誌「実験社会心理学研究」は実験研究の論文のみが掲載されるのでしょうか。

答えは否でしょう。理念や歴史的経緯はともかくとして、実状は広い意味での社会心理学を研究し、成果を発表していることに疑いの余地はありません。例えば、本学会はアジア社会心理学会と連携してAJSPを共同出版しています。

このような実状からして、多くの負担を抱えながら独立して本学会を運営していくよりは、今後は日本社会心理学会（社心学会）と合併していった方がよい、という意見を述べさせていただきます。本学会の独自性を強調される方には異論があるかもしれませんが、少し話を聞いていただきたいと思います。なお、私は現在本学会の監査の立場にありますが、すべて一会員としての意見です。

本学会はもうすぐ選挙が実施され、役員が改選されます。私の会則等の理解が正しければ、現在の会長の杉万さんは交替せざる得ませんし、常任理事の方も、会長に選出される1名の方を除いては、その任からはずれません。理事も大方改選されます。それ以外の方が運営の実務を担当することになるわけです。会長や事務局のこれまでのご負担は想像を超えるものがあつたのではないかと思います。後任の方はそれを担っていくのでしょうか。

他方で本学会では会費の値上げが不可避であると聞いています。1999年度からAJSPへの支出が会員一人当たり30ドルですが、次の事務局の特に若い方々に犠牲的奉仕をさせないことを考えると、会員がさらに少しずつ負担をする必要がある

差異化こそ----グルダイと社心

会長 杉万俊夫

まず、グルダイは社心の部分集合であるという、よくある誤解を払拭しておこう。読んで字のごとく、社心、すなわち、社会心理学は、「心理学」の一分野である。心理学の教科書には、心理学とは、個人の行動と意識についての科学である、と定義されている。そこで言う科学とは、自然科学と同様、論理実証主義に基づく実証科学である。

一方、グルダイは、クルト・レヴィンが、初めて、「グループ・ダイナミクス」という言葉を用いた著書（正確には、レヴィンの没後、D.カートライトによって編集された論文集）のタイトル----「社会科学における場の理論」----からわかるように、「社会科学」の一分野である。また、レヴィンが、実証科学としての科学を追究したのは事実であるが、現在の社会科学には、実証科学とは異なる「もう一つの科学」を志向する動きが台頭しつつある。

要するに、グルダイは社会科学、社心は心理学と、両者は軸足の置き所を異にしている。両者の間に包摂関係などない。まず、このことを銘記すべきである。

しかし、「実社心研」と「社心研」の中身は、ほとんど互換可能とさえ言える現状にある。そして、こうなった責任は、グルダイにある。レヴィンの没後、その弟子たちの研究は、一部の例外を除いて、「心理学」化していった----個人の行動、態度、認知に関する研究が主流になった。また、日本の研究者も、これに追随した。JPSPやJESPの論文を数本引用するだけで、自らの研究が正当化されるかのような風潮が生まれた。

では、グルダイが進むべき道は?これを本格的に論じるのは、本稿の目的ではない。これについては、私自身（Sugiman, 1997; 杉万, 1998）、私論を提示してきたし、ガーゲン（1998）

でしょう。6000円の倍増という事態だってありえるかもしれません。私たちの研究領域の発展のために、このような負担を続けるという選択肢しかないのでしょうか。社心学会と合併していくことは、有望な選択肢だと思います。社心学会と合併してこの負担の問題を考えていけば、運営を担う人の仕事の負担の点では現行の合計以下に、会費の点でも現行の合計額程度ですむだろうというのが私の予想です。

私が調べたところ本学会員（800名弱）の内およそ63%の者（500名弱）が社心学会の会員でした。最近のGDニュース10号、11号に載った新入会員では79%になります。現在の理事に至っては100%が社心学会員です。また例えば、本年度大会の準備委員長は両学会の理事ですし、準備委員は100%が社心学会と重複しています。これだけ会員や運営を担う人が重複している二つの学会というのはちょっと驚異的ではありませんか。両学会の内容を質的に検討したとしても、大会発表、シンポジウム、学会誌論文などのいずれを検討しても、ささいな差異しか見いだされないと思います。

「いやしかし、二つが学会があると発表のチャンスが増える」というメリットがあると信じている方がいるかもしれません。けれども過去十年ほどで近接の学会は飛躍的に増えました。国際学会での発表も身近になりました。たとえ社心学会がなくても、私たちの研究発表の機会は利用できない数だけあります。むしろ、両学会大会で似たような聴衆を相手に研究発表をすることに精一杯で、近接学会（例えば日本マスコミ学会や日本心理学会）などに出かけていって活躍することが少なくなったと感じるのは私だけでしょうか。社会心理学の中で充足するあまり、分野を越えた研究活動が低調になっているのです。

「実社心研やAJSPがなくなるとしたら大きなデメリットだ」と感じている方は多いと思います。しかし、合併したからといって学会誌を一つにする必要はありませんし、JPSPのように一つの雑誌の中をセクションに分けるといったことも考えられます。他の予想される多くの困難についても、私たちが知恵を働かせることが可能ではないでしょうか。学会誌に関して付言すれば、4年前の学会改革に際して実社心研の「大衆化」（教育的配慮をして可能な限り掲載できるようにするという編集方針）を打ち出したことが、現在私が論じているような事態の発端だったと思います。ここで詳しく説明している余裕はありませんが、その方針は学会員に一定の利益をもたらしましたが、審査・編集する人にそれまで以上の負担を強いていました。そして社心研もそれに類似した方針を出し、ほぼ同じ層の人たちが審査編集の任に当たっています。そういった層の人たちがたとえエリート主義的活動に向かうとしても、大衆化した学界は一つにまとまった方がよいと思うのです。

「吸収合併されるのは嫌だ」と思われる人は多いでしょう。その通りです。合併するなら対等であるべきです。国際化、アカデミックな学会への発展という点では、本学会の方が先進的であり、人数の多さという点だけから各学会を評価することはできません。しかし、意地を張ったり、過去のセンチメントに流されたりせずに、実をとることを考えていただきたいと思います。過去の栄誉はもちろん大切ですが、それに固執する必要はないと思います。「合併」という言葉が嫌なら、「統合」でも「合同」でも結構です。

以上の意見の実現はたやすくはありません。多くの議論が必要です。どのような方法を取ったら望ましいのか、多くの知恵と地道な努力が必要でしょう。しかし私たちは、将来の社会心理学者、グループ・ダイナミックス研究者のためにも、2つの学会を運営・維持することに消耗するよりも、1つにまとまって実質的な研究の発展のために尽くすべきではないでしょうか。

の優れた論考も翻訳されているので、それらを参照していただきたい。また、研究の中身に関連して、「実社心研」という機関誌の名称も、再検討する必要があるように思われる。これについては、すでに、「ぐるだニュース第5号（1995）」で問題提起を行っている（同文は、本学会ホームページに掲載中）。

しかし、「実社心研」と「社心研」の重複部分を、完全に排除すべきだなどと言うつもりはない。グルダイと社心は、前述のとおり、軸足の置き所こそ異にするものの、互いに最近接領域であることも事実である。そのような2つの学会にあっては、むしろ、ある程度の重複部分があることは自然でさえある。

現在、グルダイ会員の約半数は、社心の会員でもある。この事実も、両学会が最近接学会であることを考えれば、自然なことであって、特に問題視するようなことではない。むしろ、グルダイ会員の約半数は、社心の会員ではないことを忘れるべきではないだろう。

グルダイと社心の併存に、耐え難い無駄を感じ、両者の合体をすら唱える方々には、ためらわず、二者択一されんことをすすめたい。それによって、仮に、本学会の会員数が一時的に減少しようとも、何も気にすることはない。そんなことは、差異化を追求するプロセスの、小さな出来事に過ぎない。したがって、仮に、二者択一の結果として本学会を去る人が出て、決して、冷やかな態度をとるべきではない。去り行く人であっても、最近接学会の親しい友人であることに変わりはないのだから。

引用文献

- K.ガーゲン 1998 「もう一つの社会心理学」 ナカニシヤ出版。
Sugiman, T. 1997 A New Theoretical Perspective of Group Dynamics. In K. Leung et al. (Eds.) Progress in Asian Social Psychology, vol. 1., John Wiley & Sons.
杉万俊夫 1998 「集合性の理論---グループ・ダイナミックス」 山口 勲（編著）放送大学テキスト「社会心理学---アジアの視点から」。

●● 新たな研究の視点を求めて 第46回大会へのご案内 ●●

名古屋大学情報文化学部 長田雅喜

日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会は、9月26日（土）・27日（日）の両日、名古屋大学の情報文化学部・共通教育棟を会場にして行われます。現在、名古屋大学の会員を中心に東海地区在住の有志会員が協力して準備を進めております。

研究発表の形式としては、従来と同様に、ロングスピーチ、ショートスピーチ、パネル発表の3種類を用意しています。また、会員が自由に企画をし討論を深めることのできるワークショップも設けます。いずれも申し込み期限が6月30日（火）、原稿提出期限が7月31日（金）となっています。原稿提出期限は、大会プログラム・論文集の印刷に要する日数を考えますと、もうぎりぎりのところに設定してありますので、どうぞ期限を厳守してくださいようお願いいたします。詳しくは、3月に皆さまにお送りいたしました「第46回大会ご案内」をご覧ください。どうぞ奮ってお申し込みください。

ここでは、その後確定しました特別企画である特別講演とシンポジウムの内容についてご紹介させていただきます。特別講演は、大会第1日目の午後に「隣接領域に学ぶ」をメインテーマとする2つの講演を設けることになりました。1つは、広島大学名誉教授で、京都文教大学教授の鐘幹八郎氏に「日本人の自我構造と対人関係」と題して臨床心理学の立場からお話しいただきます。日本人の対人関係の特徴は、明確な自我・個性が欠けているところに起因する面があると考えられます。鐘氏は、最近『恥と意地-日本人の心理構造』を著され、日本人の自我構造が「皮膚自我」と「アモルファスな自我」からなるという論を展開されています。とくに、これらの自我構造と対人関係との関連性について論じていただく予定です。

もう1つの特別講演は、名古屋大学名誉教授で、現在藤田保健衛生大学教授の笠原嘉氏に「視線恐怖の生起とその場面状況」と題して精神医学の立場からお話しいただきます。日本人に特有とされる視線恐怖が、「知っているけれど親しくない」といういわゆる世間の人との間で生じ、しかも笠原氏によれば2人関係では生じなくて3人関係において初めて顕在化するということです。笠原氏には、この点を中心に論じていただく予定です。このような特別講演を企画した理由は、「日本人論」をとりあげたいからではなく、大会第2日目に予定しているシンポジウムへと繋げて行きたいと考えたからです。つまり、2つの講演をシンポジウムへの導入の基調講演として位置づけようと考えたわけです。

さて、そのシンポジウムのテーマは、「自己研究・対人関係研究・集団研究の全体的な関連性を求めて」です。自己研究、対人関係研究、集団研究は、Tajfel,H.らの社会的アイデンティティ理論に関する研究などの一部を除いては、3領域全体としての関連性を十分に追究することなく、研究がなされてきた傾向があります。いうまでもなく、自己は、多くの場合、集団や組織の中における自己にほかなりません。対人関係も、ほとんどの場合、2人関係として研究されていますが、現実の2人関係の多くは集団や組織の中の2人関係であることが多いといえます。笠原氏の所論は、視線恐怖の生起とその場に居合わせる人数との関係を問題にしているわけではありますが、自己研究や対人関係研究や集団研究に一石を投ずる視点を含んでいるのではないかと考えられます。同様に、鐘氏の所論についても、重要な視点、あるいは議論へのきっかけが得られる可能性があります。2つの講演の内容をふまえて、シンポジウムでは、自己研究・対人関係研究・集団研究の全体的な関連性を深く追究してみたいと思います。パネリストとして、自己研究の立場から遠藤由美氏（奈良大学社会学部）、対人関係研究の立場から大坊郁夫氏（北星学園大学社会福祉学部）、集団研究の立場から山口裕幸氏（九州大学教育学部）にご登壇願ひ、討論を通して新たな研究の視点を追究してみたいと思います。

このように、今大会の特別企画は、大会第1日目の2つの講演と第2日目のシンポジウムとが一体のものとして企画されているところに特徴があります。今大会のモットーを掲げるとしたら、「新たな研究の視点を求めて」ということになります。

会員のみなさんの情報交換と親睦を兼ねての懇親会は、第1日目の特別講演のあと、名古屋大学構内の生協南部食堂で行います。名古屋コーチンのやきとり、きしめんはもちろんのこと、地酒なども十分に用意させていただきます。気軽に楽しく語り合える懇親会にしたいものと念じております。

なお、大会のプログラムは、8月末にはお手元にお届けすることができると思います。それ以前に内容をお知りになりたい方は、大会用ホームページをご覧ください。アドレスは、
<http://www.psy.educ.nagoya-u.ac.jp/gd46/home.html> です。

2日間という短い会期ですが、とにかく充実した内容にしようと、準備委員一同いろいろと知恵をしばって準備を重ねております。季節は初秋、研究発表には絶好の季節です。会場から徒歩で10分ほどのところに、東山公園もあります。少し足を伸ばせば、犬山に明治村や日本モンキーパークもあります。ぜひとも今年の名古屋での大会に足をお運びくださいますよう、多数の方々のご参加をお待ち申し上げております。

★★ 本学会としての「資格認定制度」について ★★

会長 杉万俊夫

昨年の総会でも報告しましたように、常任理事会では、本学会としての資格制度の創設について検討してきました。

まず、本学会が、以下に述べるような資格制度を設けることに対して、どの程度の社会的ニーズがあるのかについて、各方面か

ら意見を聴取しました。具体的には、職場内小集団活動や組織開発に携わってきた産業界や医療界の人々、グループ方式の授業を推進してきた教育界の人々、各種のボランティア活動、NPO・NGO活動、コミュニティ活動に活躍している人々から、意見を聞きました。その結果、以下のような資格制度を待望する声が多数聞かれました。

現在、検討されている資格制度（案）は、次のとおりです。

① 2種類の資格を設ける。

（1）学部卒業生・修士修了者に与える資格で、就職時の履歴資格として記入できるもの。

名称---グループ・サイコロジスト、集団心理士、認定集団心理士、等。

認定要件---*グループ・ダイナミックス関連授業の取得単位数（8-12単位程度）

*グループ・ダイナミックスに関連する卒業論文・修士論文

（2）実社会でグループ・ダイナミックスの実践に携わった経験を有し、その経験に基づく指導や助言をなし得る者に与える資格。

名称---グループワーク・アドバイザー、グループ・アドバイザー、集団指導士、等。

認定要件---学歴を問わず、実践経験を基準とする。自己の経験に関する報告とそれを証明する資料の提出を求める。職場の小集団活動、組織開発、コミュニティ活動、ボランティア・NPO活動などの実践活動を対象とする。

②認定は、常任理事会、あるいは、別個に設置する認定委員会によって行う。認定に関わる事務業務（特に、上記（2）の資格）については、4年前まで本学会事務局を置いていた財団法人「集団力学研究所」に依頼する。

この件については、理事の方々、一般会員の方々のご意見を仰ぎながら、原案をつくり、本年度の総会にお諮りしたいと思います。どうぞ、ご意見をお寄せ下さい。

★★ 常任理事会（常任編集委員会）報告 ★★

日 時:1998年4月5日 13:00-16:00

場 所:奈良大学社会学部棟資料室

出席者: (会長) 杉万俊夫 (常任理事) 大坊郁夫、黒川正流、山口勸、山本真理子、矢守克也

【報告事項】

1. 日本心理学界協議会について

まず、山本常任理事より、同会議の最近の動向---具体的には、「資格」「学会のあり方」「心理学カリキュラム」の3つの検討委員会が発足したことなど---について報告があった。また、同協議会の活動内容について、ニュースレター等を通じて一般会員にアナウンスメントを流すこととした。

2. AJSPの審査・編集状況

山口常任理事より、次号の編集は順調に進んでいるが、日本語で審査を終了した論文に対して、英語に翻訳した後に、アジア社会心理学会の編集委員から加筆・修正の要請があったケースについて報告があった。今後は、日本語での投稿者に、英語への翻訳の後に、加筆・訂正を求める可能性もあることを周知徹底することとした。また、英文への翻訳に対する学会としての補助（翻訳者の斡旋）については、その内容、窓口等について、ニュースレター等を通して一般会員にアナウンスすることとなった。

3. 実験社会心理学研究の審査・編集状況

（1）98年4月1日現在の審査状況は、以下の通り。投稿総数41編（論文36編、資料3編、展望2編）。このうち、受理（掲載決定）が6編、審査中が33編、rejectが2編であった。なお、98年6月刊行予定の38巻1号には、すでに受理済の6編に、近日中に受理になると見込まれる3編を加えた9編を掲載することとした。

（2）また、加筆・修正に非常に長期間を要している論文が散見されるので、今後は、加筆・修正は、原則として、審査のフィードバック後3カ以内とすることとし、その旨、投稿者に要請することになった。

（3）杉万会長より、「高齢者介護のための地域づくり」をテーマとする特集企画（論文3編からなる）の提案があり、了承された。なお、掲載予定は、12月刊行予定の38巻2号。

4. ニュースレターの発行について

大坊常任理事より、次号は5月中旬頃発行予定であること、学会集報、AASPの案内、次回大会案内、国内外関連学会案内、研究会報告、新刊書籍紹介などを掲載予定であるとの報告があり、了承された。

【審議事項】

1. 新入会員について

3月受付分として、以下の3名の入会を承認した。

松野隆則（昭和女子大学） 上田淑子（名古屋市立稲永小学校） 金山富美子（大分大学大学院）

2. 「三隅賞」（仮）について

研究の国際化に資するという当初の意図を踏まえ、アジア社会心理学会大会出席者のための旅費補助に使用することが提案され、審議の結果、了承された。来年の台湾大会から適用する方向で具体的な準備を開始し、名称は、「三隅基金」（仮）とする事となった。

3. 「優秀論文賞」の選考委員について

杉万会長より、「実社心研」の編集委員が選考委員を兼ねることについて、電子メールを通じて理事より意見を聴取したところ、基本的には全員賛成であったことが報告され、審議の結果、編集委員=選考委員とすることとなった。また、選考委員長は、選考委員の互選によって選出すること、被選挙人は編集委員長を除く選考委員全員とすることとなった。

4. 本学会としての資格認定制度について

この件については、昨年度総会でも報告したように、常任理事会において検討を進めてきた。このたび、次のような案にそった資格制度の実現に向けて、さらに検討を進め、本年度総会に諮ることが合意された。

I. 産業界、教育界、地域活動家、ボランティア団体関係者から意見を聴取したところ、本学会が、以下に述べるような資格制度を設けることに対して、社会的ニーズがあることが判明した。

II. 2種類の資格を設ける。

（1）学部卒業生・修士修了者に与える資格で、就職時の履歴資格として記入できるもの。

名称（案）----グループ・サイコロジスト、集団心理士、認定集団心理士、等。

認定要件----*グループ・ダイナミックス関連授業の取得単位数（8-12単位程度）

*グループ・ダイナミックスに関連する卒業論文・修士論文

（2）実社会でグループ・ダイナミックスの実践に携わった経験を有し、その経験に基づく指導や助言をなし得る者に与える資格。

名称----グループワーク・アドバイザー、グループ・アドバイザー、集団指導士、等。

認定要件----学歴を問わず、実戦経験を基準とする。自己の経験に関する報告とそれを証明する資料の提出を求める。職場の小集団活動、組織開発、コミュニティ活動、ボランティア・NPO活動などの実践活動を対象とする。

III. 認定は、常任理事会、あるいは、別個に設置する認定委員会によって行う。認定に関わる事務業務（特に、上記（2）の資格）については、4年前まで本学会事務局を置いていた財団法人「集団力学研究所」に依頼する。

5. 役員選挙について

本年度実施される役員選挙について、規定に従い、選挙管理会を組織することとなり、黒川正流、外山みどり、遠藤由美の3氏に、選挙管理会委員を委嘱することとなった。なお、ニュースレターに選挙日程等に関するアナウンスメントを掲載することとした。

◎◎ 日本心理学界協議会発足およびそれ以後の経緯についてのご説明 ◎◎

一昨年来、臨床心理士の資格認定に関連して、認定協会の大学院指定制が日本の心理学関係者に与える影響を危惧する声上がり、日本心理学会の関連諸学会への呼びかけで「心理学界協議会」という名称の協議会が、合計4回開催された。そこでの主たる議題は、認定心理士の資格認定のための大学院指定制であり、認定協会と実施の主旨、実施方法等に関して熱心な質疑が交わされた。グループダイナミクス学会からも、指定校制の導入反対という立場で会長及び担当常任理事が参加した。心理学界協議会から大学院指定制の実施に関して更なる検討と実施の延期の申し出がなされたが、認定協会はこれを受け入れず、昨年四月よりなし崩し的に大学院指定制が開始された。これらの経緯を踏まえて、心理学界協議会の参加学会の中から関連諸学会間の密なる連携が必要だという認識が強まり、心理学界協議会の継続と充実のために日本心理学界協議会全体会議の他に、その下位組織として、「教育カリキュラム・システム」「資格」「学会のあり方」の3つの検討委員会を設けることとなった。諸検討委員会の構成を決定する際、学会の規模に応じて1?2名の委員を3つの委員会のいずれかに参加させる、諸委員会委員は学会の代表ではなく、心理学関係者個人として参加する、諸検討委員会の検討結果を各検討委員会連絡委員が連絡会議に持ち寄り全体的検討を加え、更にしかるべき時期に協議会全体会議にて報告するという手順で今後の運営を行うことを定めた。

当学会には1名分の委員の参加が認められ、渉外担当の山本常任理事を検討委員会委員として参加させること、また「学会のあり方」検討委員会に参加することを決定した。「学会のあり方」検討委員会はこれまでに5回開催された。そこでは、心理学界協議会の理念と目標、現状における問題と課題の整理、今後の提案などが議論されてきた。特に、協議会の役割をどのように位置づけるか、関連諸学会間の連携のあり方、日本心理学会と諸学会間の関係、日本心理学界諸学会間連絡会（当学会は昨年3月末に脱会）との関係などであった。連絡会議にて他の検討委員会の検討結果との調整を行いながら、「学会のあり方」検討委員会では、現在までに、以下の提案を検討委員会から心理学界協議会全体会議に対して行うことが検討され、決定された。

①心理学界協議会の理念を、諸学会間の連携と協力の推進、及び心理学界共通の課題への取り組みや社会問題への対応などの対外的活動の推進とすること

②日本心理学界協議会を常設の組織として設置し、当面は議長学会を日本心理学会とし、協議会の構成員は各学会の代表者（会長、理事長など）がつとめ、心理学界協議会としての協議と議決に参加すること。

③今後の検討課題として、協議会の運営のための分担金、学会間の情報交流の促進としてニュース・レター、会報などの学会情報の共有化、予算面の改善策としての会員名簿の共通化などが、取りあげられた。また、これらの点を検討するために、第62回日本心理学会大会において諸検討委員会主催のシンポジウム「心理学ワールドの協調を求めて一特に資格の問題をめぐる」を主催する。

また、この間に、日本心理学界諸学会間連絡会から当学会を含め複数学会が脱会したのにもない、諸学会間連絡会の継続が困難視される事態になり、本協議会と諸学会間連絡会との関係が議論されたが、協議会自体の成り行きが決まるまで協議会と諸学会間連絡会とは両立していくものと考えることが決定された。

これまでの経緯を眺めると、各検討委員会の熱意は持続しており、資格カリキュラムに関して熱心な議論が続けられている。しかし、日本心理学会主導で協議会が開催されており、将来日本心理学会を中心とする諸学会間の関係のあり方を良しとする雰囲気を感じられ、本学会としてその点についてどう対応するか検討を要する問題がある。また、日本心理学界協議会自体は各学会単位で構成されているが、各検討委員会委員は個人の資格で参加するという不整合な形式で運営されている点、及び3つある検討委員会に本学会からは一つしか参加しておらず協議会全体の動向がつかみにくい点など、本学会としての意向を今後どのように反映させるか、考慮しなければならない。

(文責・渉外担当常任理事 山本真理子)

◆会員名簿作成・役員選挙の実施について◆

本年(1998年)は、会員名簿の作成、および、役員選挙の年にあたっております。現在、下掲のスケジュールで作業を進めています。会員の皆さまのご協力をお願い申し上げます。なお、4月5日の常任理事会において、黒川正流、外山みどり、遠藤由美の三氏に選挙管理委員会を委嘱することが決定しました。

名簿調査カード発送	: 4月20日 (※すでにお届けいたしました)
〃 〆切	: 5月10日
選挙人台帳の作成	: 6月5日
選挙人台帳の送付	: 6月中旬 (※この後、随時、訂正の受付)
選挙人台帳の確定	: 7月上旬
投票用紙の送付	: 7月15日
投票〆切	: 7月31日
開票完了・選挙完了	: 8月中旬
会員総会 (大会時)	: 9月26日

△▼ Asian Journal of Social Psychology September, 1998 issue ▼▲

Table of Content

Author	Title
1. S. Yamaguchi et al.	Biased risk perception among Japanese: Illusion of interdependence among risk companions
2. A. Ho & K. Leung	Group size effects of risk perception: A test of several hypothesis
3. D. Matsumoto et al.	The contribution of individualism v. collectivism to cross-national differences in display rules
4. M. Fukuno & K.	Ohbuchi How effective are different accounts of harm doing in softening victims' reactions?: A scenario investigation of the effects of severity, relationship, and culture
5. R. Lee & M. H. Bond	Personality and roommate friendship in Chinese culture
6. Y. Park	Locus of control and academic achievement: Comparative analysis of Korean, Korean-Chinese, and Chinese university students
7. U. Kim	Acculturation pattern of Korean sojourners living in Tokyo, Japan

◆◆ 海外滞在記 ◆◆

○● 極秘報告書「客員研究員として迎えた日本人研究者Yamoriの素行と今後われわれが留意すべき若干の事項」 ●○

奈良大学社会学部 矢守克也

私は、1997年9月?1998年3月まで、在外研修のため、Austriaの首都Wienから列車で2時間ほどの町LinzのJohanes-Kepler大学心理

学部滞在了。ホスト教授のWolfgangWagner教授をはじめ、スタッフの皆さんに暖かく接していただき、初めての在外研修を恙無く終えることが出来た。ところで、このほど、「スパイのような人」が記したと想像される極秘報告書（「客員研究員として迎えた日本人研究者Yamoriの素行と今後われわれが留意すべき若干の事項」）の一部を入手したので、これを翻訳し私自身の体験記に代えたい。

『...（前略）...ゼミナールにおいては、彼の身体動作に幻惑されないように十分注意する必要がある。彼は、ゼミナール中、しきりに首を上下動させ、周囲の主張に賛同する素振りを見せた。しかし、「How do you think of it?」と踏み込んで訊ねることは禁物である。彼は、突如、周章狼狽し、「Yes, Yes」と連呼するばかりの錯乱状態に陥った。また、一度など、彼は、例によって、「Yes, Yes」、さらに、最近になって彼の帳面に加わつたらしい「I see what you mean」を連発しながら、数分間にわたって熱心に私の話に耳を傾けた後、おもむろに言ったものだ。「Pardon?」。私は、名状しがたい徒労感に苛まれた。

結局、私の記憶に誤りなくば、彼がゼミナールで積極的に言葉を発したのは、ただの2回だけ---初回と最終回---である。ゼミナール初日、彼は臍を決して立ち上がり、「Ladies and gentlemen...」と始めた。私は、日本人は皆、消極的で内向的だと伝え聞いていたので、予想もしない彼の積極的な態度にいささか面食らった。しかも、彼は、「ゼヒトモナサンニオワタシタイモノガアリマス」と精一杯の英語で口上を述べて、茶封筒を取り出すではないか。彼自身のペーパーか何かを持参したのだろう。彼のお陰で今年のゼミは、存外活性化するかもしれない。秘かな期待をもって、私は笑顔で彼を促した。しかるに、彼が取り出したのは、オリガミ・ペーパーであった。その日のゼミが、阿鼻叫喚の折紙教室と化してしまったことは付言するまでもあるまい。

そして、最終回。半年間の沈黙が遂に破られる日がやって来た。その日、私は、いつになく堅い彼の表情からすべてを読みとっていた。この日ばかりは、有終の美を飾るべく、彼としてもそれなりの覚悟で臨んでいるのだ。最後の最後でゼミナールに寄与し、自己を強く印象づけるべく決意を固めていると思われた。はたして図星であった。彼は、ゼミの進行などお構いなしに唐突に立ち上がると、感極まったように言い放った---Can I take a picture?

思い出は尽きない。ゼミでは徹底して鳴りを潜め体力の温存を図る一方で、文献のコピー作業には心血を注いだ。わずか半年の間に、彼は心理学部の2年分のコピー費用をたった一人で消尽した。また、他大学から著名な客人が来訪すると、しきりに名刺を欲しがった。そのくせ、名刺を入手すると間髪を容れず逃げ去った。おまけに、彼は、蒐集した名刺をしきりにコピーした。あまりに不可解なので理由を尋ねてみると、「オミヤゲ、オミヤゲ」と意味不明の日本語を口走るばかりで、どうにも要領を得ない。そして、聞きしに勝る社交下手。パーティに誘うと必ず熱を出し、インターネットが開通するや否や自室に引き籠もり、祖国の同業者との文通に余念がない。結局、彼が一番生き生きとしていたのは、日本からやってきた友人を迎えたときだった。その日だけは、それまでの内気が嘘のように明るく振る舞った。しかも、驚いたことに、日本人相手に、わざわざ、苦手なはずの英語で氣勢を上げている。嗚呼、ジャパニーズ、端倪すべからず。極東の島国は、今でも素敵な謎に満ちている。...（後略）...』

◆◇ アメリカ人の集団主義観察記 ◇◆

北海道大学文学部 結城雅樹

階段を駆け上がりスタジアムの観客席へと出た私は、突然目の前が真っ赤になるのを感じた。そこに広がっていたのは、スタジアムを埋め尽くした9万人の人々が着た赤いTシャツやトレーナーだった。それはもはや9万人の個人の集まりには見えず、一体となつて一つの声を出し、一体となつて動く、巨大な赤い生物として知覚された。

1997年9月から、1998年3月まで、私は米国オハイオ州立大学(OSU)の心理学科にpost-doctoral visiting scholarとして留学し、Marilynn Brewerとの共同研究を行った。本来は、ここで「アメリカ社会心理学の動向」などといった内容を書くに格好いいかもしれないのだが、ろくに知らないことをあたかも知ったように書くというのは性に合わないので、controversialな情報提供をすることで代えさせていただきたい。短い滞在中に、しかし強烈なインパクトをもって私に影響を与えた、「アメリカ人の集団主義」の一例である。

11月のある日、私は、大学のキャンパス内にあるスタジアム、OSU対ノースウェスタン大学のアメリカンフットボールの試合を観戦しに来ていた。そこで、冒頭の場面に会ったわけである。人々の服の赤色は、OSUのスクールカラーである。

中西部の大学生にとって、大学対抗フットボールは極めて重要な関心事である。チームが勝った翌日にはハッピーな挨拶が交わされ、負けた翌日には暗い顔をした学生たちがお互いを慰めあふ。実はそれは大学生に限らず、OSUの場合は、地域全体が応援しているといつてよい。

フットボール観戦の様々な局面で、大学アイデンティティを活性化しようとする集会的・個人的試みが見られる。まず、試合の数日・ときには数週間前から、マスメディアが試合について取り上げ始める。論調は、完全にOSUひいきである。当日の試合前には、Tailgate party-試合前にスタジアム周辺で観客たちが行う乱痴気騒ぎ-が行われる。人々は、酒を飲み、我を忘れ、肩を組んで応援歌を歌う。試合が始まると、9万人の観客たちは声を合わせて相手チームを圧倒し、さらにチアリーダーたちが、性的な要素を含めつつ観客の一体感を促進する。チケットを入手できなかった人々は、スポーツバーや友人の家に集まり、やはり大騒ぎしながら試合を観戦する。

敵を持つことは重要である。OSUのライバルは、ミシガン大学である（実は、ミシガンの方はそう思っていないという噂があるが）。人々は、日頃からミシガンの悪口を言うことによってポジティブな社会的アイデンティティを確認する。

知覚的類似性を保つこともまた、重要である。試合当日はもちろんのこと、学生や街の人々は普段からOSU関連グッズを身に纏っている。大学の購買部は、全面積の約1/4を大学グッズのコーナーが占めている。そこには、赤色を中心としたデザインのTシャツ、トレーナー、ジャンパー、帽子、靴下、鞆、旗、マグカップ、グラス、灰皿、パービー人形など、驚くほど多彩な商品が売られている。驚くべきことは、“個人主義者”であるはずの彼らの多くが、そんな画一的な商品を平気で着たり部屋に飾ったりするということだ。キャンパスをちょっと歩けば、全く同じデザインの帽子を被った学生を何十人も見ることができる。この状況

は、滞在中に訪問したミシガン大学でも同じであった。この4月から、私は現在の職場である北海道大学にやって来た。大学グッズのコーナーは大学生協の角に小さく置かれ、大学名やクラーク博士の絵が入った服を身につけている学生をいまだに目にしたことがない（私は一度これを着て授業を行ったが、学生に笑われた）。

ここで私は「集団主義vs.個人主義文化」理論に思いを馳せた。日本を集団主義文化、アメリカを個人主義文化とするこの理論と、この観察は矛盾するのではないか。ではこの観察は、単なる例外なのか、それとも、、、???

☆☆ 学会・研究会等の情報掲示板 ☆☆

△ 広島地区合評会 ▼

広島大学では、社会心理学研究者有志による実験社会心理学研究の合評会を、例年通り継続して行っています。開催場所はいずれも総合科学部であり、毎回20人前後の参加者があります。発表者は各々自分の研究テーマに近い論文を選択し、それを基に毎回活発な討論が行われます。近年は、幼児心理学や教育心理学の専攻者の参加も目立ち、様々な見地・視点からの刺激的な議論がなされ、毎回充実した内容になっています。時間内に議論し尽くせないものは、夜の部に持ち越され、そこではそれこそ忌憚らない意見が飛び交っています。昨年度の講読論文は、次の通りでした。

- | | |
|--------|--|
| 5月24日 | ・発表者 大杉恵子
36巻1号 樋口康彦
「スポーツ集団における組織集団とメンバーの達成動機との関連について」 |
| 6月28日 | ・発表者 谷口弘一
36巻1号 益田 圭
「被差別部落をめぐる周辺住民の常識的知識と実践的推論 ?同和政策に対する不満へのエスノメソロジーの視点からの事例研究?」
・発表者 長谷川孝治
36巻2号 田村美恵
「情報処理の視点がillusory correlation（誤った関連づけ）現象に及ぼす効果」 |
| 7月19日 | ・発表者 山浦一保
37巻1号 村本由紀子・山口 勲
「もうひとつのself-serving bias:日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について」 |
| 8月23日 | ・発表者 木村堅一
37巻1号 菊池雅子・渡邊席子・山岸俊男
「他者の信頼性判断の正確さと一般的信頼 -実験研究」
・発表者 菅沼 崇
36巻1号 菅沼崇・古城和敬・松崎学・上野徳美・山本義史・田中宏二
「友人のサポート供与がストレス反応に及ぼす効果」 |
| 10月11日 | ・発表者 中村佳子
37巻1号 橋本 剛
「対人関係が精神的健康に及ぼす影響?対人ストレス生起過程因果モデルの観点から?」
・発表者 西村太志
37巻1号 岡田圭二
「評価的判断が記憶成績に与える影響?自己参照と社会的参照に注目して?」 |
| 3月19日 | ・発表者 神蘭紀幸
36巻2号 岡田圭二
「自己参照方向づけ課題の認知処理の特性」
・発表者 永井智久
37巻2号 日高由香子・山口 勲
「内外集団間差異の知覚が内集団での合意性推測に及ぼす影響」 |

(文責・神蘭紀幸)

▽ 名古屋社会心理学研究会 ▲

NSP (Nagoya Social Psychologist's Group) とは、名古屋社会心理学研究会の略です。研究会のメンバーだけでなく、外部からの先生もお招きして話題提供をしていただき、自分の研究の視野を広めようという趣旨に基づいて行われています。現在会員数は約50名で、長田雅喜先生(名古屋大学情報文化学部)を中心として、事務局は名古屋大学教育学部内におかれています。本研究会は社会心理学に興味をお持ちの方ならどなたでも参加可能です。本年で16年目を迎えた本研究会ですが、毎回25名前後の方にご参加いただいており、約2時間の研究会の後、お食事会というパターンが恒例となっております。

昨年度の報告内容と話題提供者は以下のようになっております。

97年度第1回(4/26):「女性の"家"意識と人間関係」(坂西友秀氏・埼玉大学)
 第2回(6/21):「児童の社会的責任目標が学業達成に影響を及ぼすプロセス」(中谷素之氏・名古屋大学)
 第3回(8/28):「オリンピックと外国人イメージ -ソウル・バルセロナ・アトランター」(村田光二氏・一橋大学)
 第4回(10/25):「合評会 合評論文,矢守論文」災害の風化に関する基礎的研究 ?1982年長崎大水害を事例として?<発表者 坂本剛>、渡辺・寺井・林・山岸論文"互酬性の期待に基づく一回限りの囚人のジレンマ行動における協力行動<発表者 元吉忠寛>」
 第5回(12/6):「一貫性・一貫性への志向性は何によって生じ、何を生じさせるか」(浦光博氏・広島大学)
 第6回(3/7):「夫婦関係の社会心理学 ?衡平理論による接近?」(諸井克英氏・静岡大学)
 98年度第1回(5/23):「学級集団における交友関係の形成と適応過程に関する縦断的研究 ?課題志向性・社会志向性の観点から?」(石田靖彦氏・名古屋大学)

会員は基本的に東海地区の先生方が多いのですが、地域を越えて参加していただくと、会員にとって大変よい刺激になると思います。気さくな研究会であり、また研究会の開催等のご案内はメール等で行っておりますので、興味のある方は是非参加してみてください。

(文責:名古屋大学 橋本 剛)

★★ 今年の関連学会大会予定 ★★

	月	日～日
日本家族心理学会第15回大会(専修大学神田校舎)	5	30 31
日本コミュニケーション学会第28回大会日本学商学部)	6	20 21
日本認知科学会第15回大会(名古屋大学)	6	25 27
美術解剖学会第6回大会(東京芸術大学)	7	18
日本教育心理学会第40回総会(北海道教大函館校)	7	18 20
日本感情心理学会第6回大会(北星学園大学)	8	23 24
産業・組織心理学会第14回大会(東北学院大)	8	26 27
日本応用心理学会第65回大会(龍谷大学)	9	5 6
日本性格心理学会第7回大会(大阪学院大学、吹田メイシアター)	9	9 10
日本犯罪心理学会第36回大会(帝京大八王子校舎)	9	11 12
日本行動計量学会第26回大会(立教大学)	9	16 18
日本心理臨床学会第17回大会(名古屋国際会議場)	9	18 21
日本健康心理学会第11回大会(文化女子大)	9	20 22
対人行動学研究会第19回大会(名古屋)	9	25
日本グループ・ダイナミックス学会(名古屋大学)	9	26 27
日本顔学会第3回大会(国立民族博物館、吹田)	10	3 4
日本行動科学学会第6回大会(安田生命アカデミア)	10	7
日本心理学会第62回大会(東京学芸大学)	10	8 10
日本社会心理学会第39回大会(筑波大学)	11	7 8

▲△ 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション(HC)基礎研究会 ▲△

計測自動制御学会ヒューマン・インターフェイス部会、日本グループ・ダイナミックス学会共催

○ 6月5日(金、13:00から)、6日(土、10:00から)

「コミュニケーションの心理・生理および一般」

場所:北星学園大学6号館

なお、プログラムは、<http://www.ipc.hokusei.ac.jp/~z00110/hc98.html>を参照のこと。

◆◆ インターネット・ホームページ ◆◆

GD学会、<http://www.nacos.com/JGDA/>

AASP、<http://cougar.vut.edu.au/~cynthia/>

1999 ASSP Meeting、<http://king.cc.ntu.edu.tw/~890/>

(なお、開催日等は、1999年8月4-7日、中華民国、台北)

●○ いくつかの新刊書（スペースの制約上、副題は省略）○●

1998年1月以降

渡辺恒夫・中村雅彦 オカルト流行の深層社会心理	ナカニシヤ出版
小出 寧 男と女の心理テスト	ナカニシヤ出版
ガーゲン、K.J. (杉万俊夫他訳) もう一つの社会心理学	ナカニシヤ出版
青木孝悦監修 性格心理学ハンドブック	福村出版
鎌原雅彦他編 心理学マニュアル質問紙法	北大路書房
ブレックマン、E.A.(濱治世・松山義則監訳) 家族の感情心理学	北大路書房
鈴木康平編 教育心理学	北大路書房
深田博巳 インターパーソナル・コミュニケーション	北大路書房
坂田桐子 リーダーシップ過程における性差発現機序に関する研究	北大路書房
菅原健介 人はなぜ恥ずかしがるのか	サイエンス社
西田公昭「信じるこころ」の科学	サイエンス社
池上知子・遠藤由美 グラフィック社会心理学	サイエンス社
松井豊・浦光博編 人を支える心の科学	誠信書房
斎藤勇編 対人社会心理学重要研究集6	誠信書房
ハーヴェイ、J.H. (和田実訳編) こころのオデッセイ	川島書店
菊池章夫 また／思いやりを科学する	川島書店
スナイダー、M.(齊藤 勇監訳) カメレオン人間の性格	川島書店
松井豊・水田恵三・西川正之編 あのと避難所は	ブレーン出版
末永俊郎・安藤清志編 現代社会心理学	東京大学出版会
山岸俊男 信頼の構造	東京大学出版会
大橋英寿 沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究	弘文堂
星野命編 対人関係の心理学	日本評論社
松井豊編 恋愛の心理 現代のエスプリ368	至文堂
安藤清志・西田公昭編 「マインド・コントロール」と心理学 現代のエスプリ369	至文堂

1997年7月以降

杉本徹雄編 消費者理解のための心理学	福村出版
堀洋道・山本真理子編 新編社会心理学	福村出版
大淵憲一編 紛争解決の社会心理学	ナカニシヤ出版
榎本博明 自己開示の心理学的研究	北大路書房
奥田秀宇 人をひきつける心	サイエンス社
鈴木康平・松田星編 現代青年心理学	有斐閣
坂本真士 自己注目と抑うつ社会心理学	東京大学出版会
柏木恵子 文化心理学	東京大学出版会
池田謙一編 ネットワーキング・コミュニティ	東京大学出版会

◆◆ ニュースレターの編集、記事の投稿 ◆◆

連絡先 北星学園大学社会福祉学部大坊研究室 〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2-3-1

電話011-891-2731 (内線463) FAX011-894-3690

E-Mail:daibo@hokusei.ac.jp

<http://www.ipc.hokusei.ac.jp/~z00110/>

【編集後記】 * 海外研修中、しばらく担当を休ませていただいております。他の常任理事、会長にお世話になりました。また、この号の発行も前号からしばらく間隔が空いてしまいました。今号は、本年度の大会開催、資格問題、心理学学界の最近の動きに関する記事があります。また、本年度の学会日程や新しい関連書籍なども盛り込みました。なお、これらの情報、十分ではないかもしれませんが、ご寛容ください。この編集（間が空きながらでしたが）の任を、新たな常任理事に引き継ぐことになります。これまでの皆様のご協力に感謝いたします。（坊）

